



第 44 号
編集・発行
信州大学附属図書館
繊維学部分館
平成14年7月31日

CONTENTS

| | | | |
|----------------|--------|-------|------|
| 世界のシルクの町へ飛ぶ(1) | 分館長 | 三浦 幹彦 | (2) |
| 主題別科目ゼミナールを終えて | 機能機械学科 | 森川 裕久 | (6) |
| 分館通信 告知板 | | | (9) |
| | 分館日誌 | | (10) |
| 編集後記 | | | (10) |

Library(電子版)はインターネットでも提供しています。
URLは <http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/online.html> です。

世界のシルクの町へ飛ぶ(1)

分館長 三浦 幹彦

繊維学部附属図書館長の挨拶を書き始めたたん、事務引継ぎの席での図書館職員の方々の言葉が頭の中を駆け巡った。「短くていい」「A先生は連続ものの面白い記事を書く」「...」。ウーム、なかなか手ごわいプレッシャーだ。よし、それなら「もうやめてください」と言われ、後世にまで語りつがれるほどの長編ものを書き上げてやろうと一大決心し、出来上がったのが、これから始まる話である。話の中にインターネットのアドレスを入れたので実際に確かめながら進んでもらうとありがたい。さて挨拶ではなく話を始めよう。

1. インターネットで出会った記事

シルクに関する資料を求めてインターネットのホームページを探し回っていたときのことである。次のような記事が偶然目についた。

シルク王の大邸宅が博物館に

1999年5月14日 金曜日

ダン・クラウト記者(パターソン発)

現在、1世紀以上も前に建てられたシルク王の大邸宅修復工事をすでに4年の歳月を費やして行っているが、修復終了までにはまだあと1年が必要である。修復が完成したあかつきには、このランバート邸をパシック郡の歴史博物館として一般公開する予定である。これは、ニュージャージー州で最高の博物館となるだろう。

残念ながら現在この記事はすでにインターネット上から消されている。

このシルク王大邸宅の記事は、私の興味を引きつけた。岡谷市で見学した旧林家住宅(シルクの館)の様子が頭に浮かんだからである。ところで、この記事の発信地アメリカニュージャージー州パターソンとはどんな所なのだろうか。

2. アメリカ「シルクの町」へ

早速、アメリカに飛んだ。正確に言えばインターネットでパターソンを紹介しているホームページの幾つかに繋げてみた。そのうちの1つをあげてみよう(<http://travel.lycos.com/Destinations/location.asp?pid=243740>)。要約すれば次のような所らしい。

パターソン、ニュージャージー州

1791年にアメリカ最初の計画工業都市(しかも最初の綿紡績工場の地)として開発されたパターソンは、魅惑的な繊維の生産工場の成功により、今日、「シルクの町」という名前を付けられている。パターソンへの訪問者は、この町のまわりの壮観な光景と歴史を堪能できるだろう。70フィートの高さを有する「大滝」は、パサイック川を区切り、毎日百万ガロンもの水量を落としており、この滝を見物に各地から旅行者がやってくる。人口は約14万人でパサイック郡で最大の、ニュージャージー州で3番目に大きい町である。

パターソンの歴史についても簡単に年表で紹介しよう。

| | |
|------|-----------------------------|
| 1790 | ウィリアム・パターソンがニュージャージー州の知事となる |
| 1831 | パターソン市が発足 |
| 1832 | 綿紡績，織機の製造会社が創立される |
| 1835 | サム・コルトが拳銃の製造を開始 |
| 1869 | 市紋章の制定 |
| 1913 | シルク労働者のストライキ |

パターソンという町の名は，ニュージャージー州の知事の名前に因んだものらしい。また，パターソンの歴史上重要人物というページ

(<http://www.patersonhistory.com/people/famous.html>)があったので，そのビジネス欄を眺めた。そこに，5人の名前があったが，次に示すように，そのうちの3人がシルクと関係ある人物であった。

| |
|----------------------------------------------|
| カサリナ・ランバート(1834-1899)，シルク工場の経営者，ランバート城の建造者 |
| ジョン・ライル(1817-1887)，パターソンで最初のシルク工場成功者 |
| ハナ・シルバーマン(1896-?)，1913年のパターソンシルクストライキの指導者の一人 |

ビジネス欄の著名人の多くがいずれもシルク関係の人物であるとはいかにも「シルクの町」らしいと感心しながら，インターネットのページを検索していた。この時，このうちの一人が後の話の展開で重要な役割を果たすとは思ってもよらなかった。次に行き当たったのが，アメリカ内務省の公開資料である。この資料にはかつてパターソンにあった「フェニックス工場」の歴史とデータが詳細に述べられていた。そこから興味ある部分だけをまとめてみよう。

フェニックス 工場 (<http://www.patersonhistory.com/industry/phoenix.html>)

「1850年のニュージャージー州の調査によれば，フェニックス社は綿や亜麻の生産工場として登録されている。工場内には8000スピンドルと52台の織機が備わっていた。1860年の調査では，31人の男子と110名の女子労働者が働いていた。その年の始めに，ベンジャミン・ティルトがニューヨークからパターソンにやって来て，フェニックス工場の最上階にシルクの撚糸会社を創設した。このシルク撚糸会社は繁栄を重ね，1865年には，ティルト親子はフェニックス社の経営権を獲得するまでになり，それに伴って綿生産からシルク生産へと変化した。経営権獲得後5年で，フェニックス社は年間3万9千ポンド（約18トン）のシルク，当時のお金で46万8千ドルのシルクを生産した。1870年の調査では，4万725ポンドの中国製，日本製，イタリア製，フランス製の生糸が用いられていた。フェニックス工場には何度となく増改築がほどこされ，シルク製品だけでなくその生産に必要な機械や工具までも工場内で造られるようになった。1892年，フェニックス社はフェニックス・シルク生産社と名前を変えた。」

実際の文書は，細かな土地区画のあれこれから建物の構造について事細かに記されたものであるが，ここに紹介したものは，フェニックスシルク工場の簡単な発展経緯である。綿工業からシルク工業へと転換していった経緯が細かに記録されていておもしろい。

3. 日本のシルクの町「岡谷」と「パターソン」を結ぶ糸

このようにインターネットの様々なホームページから手当たり次第に、情報を収集していくうちに、パターソンと岡谷市が大変良く似ている町であることに驚いた。ちなみに、二つの町を比較してみた。

| 岡谷市 | パターソン市 |
|-----------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日本のシルクの都 (Silk Town) シルクの館 (旧林家住宅) 諏訪湖の水 生糸 岡谷蚕糸博物館 | アメリカのシルクの町 (Silk City) シルク王の館 (旧ランバート家住宅) パサイック川の水 撚糸, 絹織物 パターソン博物館 (シルク関係展示が多い) |

(パターソン博物館ホームページ: <http://www.thepatersonmuseum.org/>)

さらに調査を進めるうちに、1904年に撮影されたシルク工場内部の写真に行き当たった。その写真には、生糸の「かせ」(シルク用語については繊維学部で公開しているシルク用語検索サイト <http://kinu.shinshu-u.ac.jp/> を参照) が大きく写っており、パターソンのシルク労働者が撚糸の準備をしている様子を写し出していた。

(<http://www.patersonhistory.com/images/silk1.jpg>) 最初は、なにげなく見ていたが、私の頭の中に、全く突拍子もない考えが浮かんできた。このパターソンのシルク工場内の写真に写っている生糸は「岡谷の生糸」である可能性はないだろうか、というばかげた考えである。

4. 調査

早速、1904年前後の生糸輸出について繊維学部図書館で資料を探した。加藤・阪田・秋谷編「日米生糸貿易資料第1巻資料編1」近藤出版によれば、1876年頃からすでに群馬県の水沼製糸所がパターソンの撚糸・絹織物業者と直接取引を行っていたようである。また、1922年(大正11年)に出版された早川直瀬著「生糸と貿易」(同文館)では、米国における絹業の発達と題する節で、1869年から1919年までのアメリカの絹織物生産高(ドル)と総輸入生糸量(ポンド)、日本の輸出生糸量(斤)を示している。これを参考にすれば、1904年のアメリカの生糸総輸入量は約5721トン、日本から海外への生糸輸出量は5795トンとある。

「フェニックス工場」資料にあったように、アメリカは日本以外にも中国、イタリア、フランスから生糸を輸入していたので、輸入量5721トンの中には当然、日本以外からの生糸輸入量が含まれている。また、5795トンの中にはアメリカ以外に輸出された量も含まれている。こうした事実を考慮しても、1904年(明治37年)当時、日本からの生糸輸入がかなりの割合であったことが予想される。これを裏付けるように、Philippa Scott は、'The book of silk', Thames and Hudson 中で、「19世紀が終わるまでに、ニュージャージー州パターソンがアメリカのシルク産業の中心地となった。生糸は日本から輸入されパサイック川の柔らかい水で染色された。」と記している。私が見たパターソンの工場内写真の生糸は日本から輸入されたものである確率が高い。しかも、これが岡谷の生糸である可能性は十分ある。科学的な推論を行うためには、この当時岡谷からどの程度の生糸がパターソン

に来ていたかを知る必要があるが、すでに、この時点で私の頭の中には、日本のシルクの町「岡谷」とアメリカのシルクの町「パターソン」が結びついた地図ができあがっていたのである。こうなると、当然のごとく「いったい、このパターソンの撚糸、絹織物技術はどこから来たのか」というさらなる疑問が沸き起こり、研究そっちのけでパターソンのシルク技術のルーツ探しを始めることになったのである。

5．てがかりを求めて

この疑問を解くてがかりと思われるものを、インターネットの意外な所で見つけた。1869年に制定されたというパターソン市のエンブレムとその説明文である。

(<http://www.patersonhistory.com/municipality/index.html>) このエンブレムには一人の男性が桑の苗を植える姿が描かれている。桑を植える姿は、このパターソンのシルク産業の中で唯一欠けていた部門を表したものだそうである。また、この絵の上にはフランス語らしき言葉で'Spe et Labore'と記されていた。残念ながら私にはフランス語、イタリア語、スペイン語の区別さえできない。しかし、この言葉を市の紋章に載せていることから、パターソンとフランスあるいはイタリアとの関係が強いことは容易に察しがついた。パターソンのシルク技術はおそらくフランスあるいはイタリアからもたらされたのであろうという予想のもとに、フランスのシルクの町「リヨン」や「ツール」に飛び（もちろんインターネットの上で）調査を始めた。イタリアシルクの町「コモ」も数日間さまよった。しかし、パターソンとの関係を見つけることができなかった。結局、エンブレムの言葉からはパターソンのシルク技術のルーツにせまることができなかった。エンブレムの言葉を見つけた時の喜びが大きかっただけに、この時の私の落胆はひどかった。

6．一枚の絵

うまくいかないルーツ探しにいくぶん飽き飽きしながら、ある場所から送ってもらった30ページくらいの冊子をなにげなくパラパラめくっていた。冊子を閉じて、別の雑誌を開き始めたが、直前に私の目の前を横切っていた冊子中の一枚の異様な絵が妙に気になった。異常に大きな円いものが目に焼き付いていた。不思議に思って、もう一度絵を眺めると大きな船の汽笛であった。船上で一人の神父を囲み集会を開いている絵だった。絵の下の説明文に目を移すと「移民に説教をするライル司教」とある。「ライル」という名前に聞き覚えがあった。少し大げさになるが、この時、なんだかわからない不思議な旋律が自分の体の中を駆け抜けて行くのを感じとった。「まさか」と思いながら、そのページのタイトルに目を通すと「移民」とある。小さな文字で書かれたその説明に目を走らせると、すぐに、二つの地名が私の目に飛び込んできた。「マクルスフィールド移民」「アメリカ パターソン」。あきらめかけた糸がひょんな事から見つかったのだ。(続く)

* 編者注) 文中に出てくるホームページへのリンクは、三浦先生から原稿をいただいた2002/06/25現在のものです。Library発行時につながらないものがあるかもしれませんがご了承ください。

主題別科目ゼミナールを終えて

機能機械学科 森川 裕久

信州大学の授業改革の一環として、共通教育の主題別科目ゼミナールは、本年度、大学評価・学位授与機構による全学テーマ別評価「教養教育」が実施されることもあり、学長はじめ教育システム研究開発センターの並々ならぬ熱意の下で始められた。私は、主題別ゼミの授業科目「現代の社会」の一授業を担当する機会を得て、今月に前期の授業を終えたことでもあるので、ここに主題別ゼミの紹介と感想を述べたい。

主題別ゼミは、平成12年11月の大学審議会答申「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」と平成13年12月の中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について（答申案）」にいう教養教育での少人数授業を实践する場と位置付けられている。

具体的には、「高い倫理性と責任感をもって判断し、行動できる能力の育成」を掲げ、「学生が自分の知識や人生を社会との関係で位置付けてみる機会を与える。そのため、討論やプレゼンテーション等を積極的に取り入れたりすることを通じて、人間や事物の多面的な理解と総合的な洞察力を涵養する方向で教育内容・方法の改善を図る」ことを唱っている。それで、1クラスの規模は20人とし、総合大学であり1年次に全学部の学生が松本キャンパスで学ぶという本学の特徴を活かして、様々なタイプの学生が出会え、様々な物の見方を知る機会として複数学部の学生が混合する授業を行うとしている。

そこで、私の企画した「くらしの中の論理学ゼミ」は、次のねらいをもって授業を行った。

政治、経済、社会、教育、自然環境などあらゆる領域で表面化している様々な問題に対して、我々はどのように考え、解決していけばよいのか考えたい。そのためには問題を正しく認識し、問題の本質をとらえることと自分の主張を的確に表現し、人に理解してもらい、行動する能力が必要である。またこの根底には、深く広い生命観ならびに人生観の形成、自らの行為およびその結果に対する深い倫理的判断と高い責任感をもって行動する成熟が求められる。

本ゼミは、世界と自分をより正しく認識しようとする心の働きを育みながら、物事を論理的に考え、言葉で表現することのできる能力を養うことを授業の目的としている。

また授業の概要は、以下の通りである。

「論理」という言葉は、日常生活の中でいろいろな表現と結びついてよく使われる言葉である。しかし、この言葉が不用意に使われることによって様々な誤解を生じさせている。前半の時間では、「論理」とは何かについての説明と身近な事柄を取り上げて、論理的に物事を考えるための練

習をする。ここでいう練習は、参加者がグループで話し合いながら一人ひとりの気づきをうながし、各自の考えを整理し、深めていくことを意味する。後半の時間では、参加者の関心のある課題を取り上げて「Conflict Resolution (争いの解決法)」と「Debate (討論)」の実際を経験し、適切な論証のすすめ方と問題解決の仕方をわかるようにする。

さて、授業の初日に受講希望者が工学部を除いた全学部から62人いたので、受講制限することにし、第2回目に主題別ゼミを少人数で行う理由と本ゼミの趣旨を改めて説明して学生自身で受講者を選別させた。学生による話し合いでルールが決められ、結局、19名が登録し、18名が授業に参加した。

最終回のクラスのアンケート結果を紹介すると、学生からの要望として、大方がディスカッションやディベートの時間を増やしてほしいというものであった。一方、クラスのディスカッションやディベートを通して、1)自分にはない考え方についても考えさせられたから視野が広がったと思う。2)他の学部の人からのいろいろな意見を聞くことが出来たし、自分の意見を言うことが出来たのでよかった。3)論理力と知識に厚みが出た。論理の組み立ても学べてよかった。4)ディベートはなかなかおもしろいものだった。人の話の要点をまとめながら聞くことや自分の意見を整理しながら人前で発言することのむずかしさを実感できて非常によかった。という感想であった。尚、使用したテキスト(野矢茂樹著「論理トレーニング」産業図書)は、わかりやすいと好評であった。

私にとって、学生の反応で印象深かったものの一つを紹介したい。「Conflict Resolution (争いの解決法)」を学生たちに試みたときのことである。これは、アメリカ合衆国で平和教育の一環として幼稚園児から高校生までを対象にしたカリキュラムとなっているものである。

東京都では、かつて都内のゴミを江東区にある夢の島に運んでいたが、地元住民の反対運動により、各区で出るゴミはそれぞれの区で処理することになり、ゴミ焼却場の建設場所について区内の地域住民の間で議論が起こったことを例にあげ、地域住民の利害の対立をどうしたら解決することができるか話し合わせた。途中の議論は割愛するが、最終的には、補助金をもらってゴミ焼却場の排熱を利用した温水プールや地域のコミュニティセンターをつくり、住民は無料で利用できるようにすることで恩恵を受けられるようにするという意見(一人の学生の出身地での実例)もあったが、補助金を地域住民に分配するという意見に集約された。すなわち、ゴミ焼却場は迷惑だけど、その償いをいくらかでも現金を手にするということで実感できるというものだった。

「グローバル化時代に生きる新しい世代には、地球社会を担う責任ある個人としての自覚の下に学際的複合的視点に立って自ら課題を探究し、論理的に物事をとらえ、自らの主張を的確に表

現しつつ行動していくことができる能力が必要とされている」訳で、大学では本授業のねらいに書いたことを意図して行うことはできるが、価値観や人間観は乳幼児の頃から家庭なりで人や読書を通して地道にかつ具体的に教えられ育まれていくものではないか。上記の学生たちの考えはある面で現代日本社会の反映であろうが、学生たちの家庭教育をしてきたはずの親は、正に我々団塊の世代であるので、我々自らの在り方を顧みる必要があるのではないかと思わされた。

今後の課題は、教師の価値観を押し付けることなく、学生の物の見方考え方にどのように関わっていき、彼らの内奥にある魂の気づきをうながすかというものである。学生たちはほとんど携帯電話をもち、一見、頻繁に情報のやりとりやおしゃべりを楽しんでいるようだが、内心は模索しながら存在する自己をありのまま表現し共感を得たいと思いつつもなかなか思うように自己表現する能力（術）も機会もないことにもどかしさをもっているようだ。それは彼らが愛に根ざした心の対話を求めているように感じられた。

告知板

ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています。

次号 Library 発行までのお知らせは、Library 号外として構内の掲示板や繊維学部分館ホームページ(<http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/>)でご案内していますので、そちらをご覧ください。

⇒ 夏季休業中の特別貸出について

夏季休業に伴い、下記の通り貸出期間を延長します。

| | | | |
|-------|----------------|---------------|-------|
| 貸出開始日 | 大 学 院 生 | 平成14年7月 5日(金) | 10冊以内 |
| | 学 部 4 年 生 | | 8冊以内 |
| | 学 部 2・3 年 生 | 平成14年7月22日(月) | 5冊以内 |
| | 研 究 生・聴 講 生 | | 3冊以内 |
| 返却期限日 | 平成14年10月 1日(火) | | |

※ 返却期限日は厳守してください。

⇒ 夜間開館の休止について

8月5日(月)～9月30日(月)の夏季休業中は、開館時間が短縮されます。
また、土曜日開館は行いませんのでご注意ください。

| | |
|-----------|-------------------|
| 休業中(平日のみ) | 8:30a.m.～5:00p.m. |
|-----------|-------------------|

業務内容は通常通り行います。

2階閲覧室には冷房が入っていますのでどうぞご利用ください。

⇒ 学術雑誌の製本について

8月より、2001年学術雑誌の製本作業に入ります。搬出日・製本雑誌等が決まりましたら、図書館入口の掲示板や繊維学部分館ホームページでお知らせしますので、ご確認ください。外注に出します
ので、製本中は資料の利用はできません。

作業期間中、ご迷惑をお掛けしますがご協力くださいますようお願いいたします。

- 4/18 第1回 図書委員会
- 5/27 第1回 信州大学学術情報・図書館委員会 出席者一三浦分館長、太田委員
- 6/5 第2回 図書委員会

編集後記

7月から台風が連続して上陸するという異例の幕開けとなった今年の夏ですが、ほぼ例年どおりに梅雨も明け、いよいよ夏本番！毎日暑い日が続いております・・・

今号は新分館長の三浦先生と機械科の森川先生に原稿をお寄せいただきました。三浦先生のお話は長編もの、そして今回かなり気になるところで「続く」となっており、次の掲載が待ち望まれます。また、森川先生のお話に出てきた主題別ゼミには、20人定員のところ62人もの希望者が集まったということで、やる気のある学生さんがたくさんいるのだなあと、大変心強い気持ちになりました。

お忙しい中快くご寄稿くださった二先生方、誠にありがとうございました。この場を借りまして御礼申し上げます。

次号は10月の発行を予定しています。利用者の皆さんの声も Library に掲載したいと思いますので、ご意見・書評など何でもお寄せ下さい。係員に直接、または E-mail での寄稿もお待ちしています。

E-mail アドレスは、jfg0100@giptc.shinshu-u.ac.jp です。